

2013年10月20日
創刊第1号

Archipels Francophones

Bulletin de l'Association Japonaise des Lettres Francophones

日本フランス語圏文学研究会

研究会発足の辞

日本フランス語圏文学研究会の設立記念会合が、2013年10月26日（土）午前10時より、日本フランス語フランス文学会の秋季大会会場、別府大学（別府キャンパス）で開催されます。

文学に限らずフランス語圏地域に関心のある方ならどなたでも歓迎。是非、当日の研究会場を覗いてみてください。

本研究会の発足メンバーは、どちらかと言えば、長年、マルティニクの作家エドゥアール・グリッサンと一緒に読んできた者たちが中心です。しかしながら、フランス語圏はカリブ海域に限定されるはずもなく、年々アフリカやケベック研究の重要性が高まっています。また、どの地域、どの作家を研究するにせよ、近年の世界情勢の急激な変化によって、広い視野に立った調査・研究が要請されているようです。

たとえば、最近注目された研究として、Pierre Bouvierの*Aimé Césaire et Frantz Fanon, Portraits de décolonisés* (2010年)や Romuald Fonkouaの*Aimé Césaire 1913-2008* (2010年)があげられるでしょう。これらの研究に共通しているのは、分かりやすく言えば、アフリカとアメリカス、ヨーロッパを横断する広い時空にファノンとセゼールを位置づけていることです。

ファノンであればアルジェリア独立戦争への関与ばかりでなく、セゼールやネグリチュードとの関係の中で、その思想的・教養的基盤を再検討しているし、エメ・セゼールであれば、詩、演劇、散文（評論）、政治の緊密な相関性や、アフリカとの双方向的な関わりを再考察していて、特定の地域や時代に限定されがちな従来の研究とは異なる、より開かれた視点が導入されています。

ポストコロニアル研究においては、従来ファノンにしてもセゼールにしても抽象度の高い思想的な点検が優先され、それぞれが置かれた具体的な状況や文化的・歴史的背景が軽んじられる傾向がなきにしもあらずでしたが、最近では思想と状況の具体的・個別的相関に分け入り、これまで見過ごされていた側面を解明する機運が高まっています。

いうまでもなく、以上はとりあえず挙げてみた例にすぎず、他にいくらかでも研究対象・テーマがあるわけですが、ともかく、ファノンやセゼールを軸とした50年代・60年代の研究を見ても大陸を越えた国際的研究交流が一段と活発になり、より横断的になっています。ようするに、フランス語圏の文学・思想・地域研究は新たな次元を迎えているのです。

本研究会設立の趣旨は、各人が自分の研究テーマを探究しつつも、フランス語圏地域の研究動向について広く情報交換できるような相互的な場を提供することです。是非とも、当研究会に多くの方が参加し、多元的で、脱中心的な研究と情報交換の場が生れることを願ってやみません。

日本フランス語圏文学研究会会長 立花英裕（早稲田大学）

日本フランス語圏文学研究会 第一回研究会合のお知らせ

10月26日（土）10時～12時

会場 別府大学 国際経営学部棟39号館3922教室

プログラム

- ・日本フランス語圏文学研究会 会長挨拶
- ・研究発表

早川卓垂「エドゥアール・グリッサンの詩集La terre inquièteの読解」

大辻 都「マリーズ・コンデ『最後の預言王たち』をめぐって」

廣田郷士「民族詩論争再考～ドゥペストル、セゼール、グリッサン～」

工藤 晋「『サルトリウス』をめぐるグリッサンの詩的意図を推察する」

- ・質疑応答、懇談

会員紹介

日本フランス語圏文学研究会のメンバーを随時紹介していきます。
新たなメンバーの入会を募集中ですので、関心ある方はご連絡ください。

大辻 都 OTSUJI Miyako

専門：カリブ海文学、現代文学全般

所属：京都造形芸術大学芸術学部

言語や地域を問わず、文学全般を個人的なテーマと考えていますが、研究領域としては、これまで主としてフランス語圏のカリブ海文学に焦点を当ててきました。

日本フランス語圏文学研究会の前身であるグリッサン輪読会には2003年から参加し、大著『アンティエユのディスクール』、続いて『ラマンタン湾』と格闘しつつ、カリブ海文学についての知見を養うとともに、個人の論文ではグアドループの作家、マリーズ・コンデのテキストを扱い、2010年、博士論文としてまとめました。この仕事の延長として、カリブ海文学研究者がこれまで取り上げることの少なかった女性の書き手たち——シュザンヌ・セゼール、シモーヌ・シュヴァルツ＝バルトラ——の書いたものを視野に入れ、カリブ海文学のなかに位置づけることを試みたいと思っています。

現在の具体的なテーマとしては、同じ1940年代前半にニューヨークで過ごしたふたりの女性学者、ハイチの民話採録などで知られるアフリカン・アメリカンのゾラ＝ニール・ハーストンと、亡命先のこの地で黒人霊歌を収集したフランス人思想家、シモーヌ・ヴェイユの接点を探るということを考えています。また昨年から所属している大学では、おもに創作を学ぶ学生たちに向け、文学全般を広く知ってもらおうというコンセプトの講義をいくつか担当しており、そうした授業を通して、カリブ海文学をはじめ、一般にはまだ馴染みがない世界文学の紹介に努めています。



今井達也 IMAI Tatsuya

専門：ハイチ文学

所属：東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻

連絡先：tellmyhorseimai@gmail.com

社会人として音楽を主体とした文化事業に長らく関わって参りました。アメリカ在住のキューバ系移民のリズム隊が支えるとあるバンドとの衝撃的な出会いが契機となり、カリブ海全般の文化に興味を持ったのですが、その演奏家の一人に私はハイチ料理屋（ニューヨークの）に連れて行かれ、またその時さらに、タブーコンボという伝説的なハイチのバンドの演奏を聴く機会にも恵まれ、気がつけば、その世界にすっかりはまり込んでいました。

思えばこの時の出会いが今につながっているのですが、これを機に、私はハイチという国に関して（歴史、文学、政治等々）調べ始めました。なかでもその過程で出会ったハイチ短編小説集の『月光浴』は私の想像力を大きく刺激しました。まだ私が知らない小説家や作品が世界には数えきれないほど存在していますが、少なくとも私がそれまで読んだものとは明らかに異なる何かがあるように思えました。それが何かを知るために研究を続けてゆきたいと思っています。

現在は主に、ハイチ系移民でケベックはモントリオールで活動をしていた作家エミール・オリヴィエの作品を読み続けている日々ですが、同時代にハイチに留まり書き続けた作家の作品との比較研究を最終的には試みたいと考えています。まだまだ先はわかりませんが、まずはこつこつとテキストと向き合う日々です。



工藤 晋 KUDO Shin

専門：エドゥアール・グリッサン研究、比較詩学

所属：東京大学大学院総合文化研究科言語情報博士課程満期退学

専門はエドゥアール・グリッサンを中心としたカリブ海文芸思潮ですが、もともと美学出身で、芸術一般に広く関心があります。巨大な思想家であり詩人であるグリッサンの世界観にはとても美学的なところがあり、今後はそうした側面に注意して読んでいきたい。これまでのささやかな研究論文では『レザルド川』、『第四世紀』、『マルモール』、『奴隷頭の小屋』、『マアゴニー』、『全-世界』といったグリッサンの小説作品の構造分析を行ってきました。今は研究会のメインの活動である評論集『ラマンタンの入江』の読解、そして後期の小説『サルトリウス』の読解を課題としています。

本職は都立高校の英語の教師。仕事と育児に追われて（あるいは遊び過ぎて）研究を怠りがちな昨今ですが、グリッサン研究を軸に、さまざまな領域横断的な思想の冒険や創造的感性の旅と出会いたいと考えています。最近ではイギリスの文化人類学者ティム・インゴルドのアプローチにも興味をもっています。彼のアプローチはグリッサンとおおきく共振するところがあります。グリッサンに傾倒する以前はカントリー・ブルース研究で修士論文を書きました。ジャズやクラシックなど広く音楽にも関心があり、「即興性」という言葉にこだわりをもっています。キース・ジャレットの音楽を敬愛する者です。グリッサンの詩学にも「即興性」という隠れたテーマがあるように思われます。優秀で多士済々の本研究会の若いメンバーから刺激と情報をいただくことを楽しみにしています。



中村隆之 NAKAMURA Takayuki

フランス語圏の文学を勉強しています。最初はマルティニク島生まれの作家エドゥアール・グリッサンの研究から始め、大学院の博士課程ではグリッサン小説と歴史記述をめぐって学位論文を執筆しました。その後、マルティニク島留学が転機となり、グリッサンをふくめたフランス領カリブの作家全般に興味を抱くようになりました。パリではずいぶん文献を収集しました。この数年間の仕事は、関心地域の作家の翻訳（立花先生との共訳となるエメ・セゼール『ニグロとして生きる』、およびグリッサン『フォークナー、ミシシッピ』）、文学史の流れをまとめた小著『フランス語圏カリブ海文学小史』などで、近著はマルティニク・グアドループ研究の書『カリブー世界論』です。現在はグリッサン論を準備しており、今後はアフリカ・オセアニア地域のフランス語文学についても知りたいと考えています。

ただ、難しいのは、その地域の文学の深い部分にまで降りようとするとき、フランス語だけではおそらく限界があるということです。言語的才能に乏しい私には問題です。また、文献収集は必須ですが、それらをどのように活用するかも考えていかなければなりません。課題は多いですが、いずれにしても「たこつぼ化」する研究ではなく、隣接する分野に開かれた研究をおこないたい。そのためにも、専門だけでなく幅広い分野に今後も関心を向け続けるつもりです。よろしくお願いたします。

早川卓亜 HAYAKAWA Takua

専門：詩作品を主とするエドゥアール・グリッサンの著作

所属：早稲田大学大学院文学研究科博士課程

これまで学部、修士と一貫してマルティニク出身の作家エドゥアール・グリッサンÉdouard Glissant（1928 - 2011年）の著作を研究してきた。卒業論文ではグリッサンの最初の小説『レザルド川』*La Lézarde*（1958年）の読解を行い、修士論文では『レザルド川』に加え『島々の野』*Un champ d'îles*（1952年）と『不安の地』*La terre inquiète*（1954年）を中心に初期の詩作品を取り上げて詩と小説の間の関係を探った。また、思潮社刊『現代詩手帖』2011年4月号で組まれたグリッサン追悼特集でグアドループの作家エルネスト・ペパンErnest Pépin（1950年 - ）による追悼文「Une âme inquiète du monde!」の翻訳（『世界とともに震えつづける魂!』）を担当し、早稲田大学文学研究科フランス文学専攻研究誌『フランス文学語学研究』第32号に論文「エドゥアール・グリッサンの詩のビジョンに関する覚え書き—サン=ジョン・ペルス論とエメ・セゼール論について—」を発表した。

現在はグリッサンの著作の中でも特に詩作品に関心を持っている。詩作品の全体を取り上げて博士論文を執筆するのが目下の目標。ほかに、グリッサンに先行するカリブ海のフランス語詩人としてサン=ジョン・ペルスSaint-John Perse（1887 - 1975年）とエメ・セゼールAimé Césaire（1913 - 2008年）の作品にも注目しており、今後研究を進めたいと考えている。



廣田郷士 HIROTA Satoshi

専門：フランス語圏カリブ海文学

所属：東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻博士課程

学部・修士は東京外国語大学で過ごしました。学部時代からカリブ海の文学世界への関心を持ちながら勉強を続け、2010年1月提出の卒業論文では、ラファエル・コンフィアンのセゼール評伝『パラドクサルな世紀の横断』を扱い、また2013年1月提出の修士論文では、特に50年代から60年代にかけてのグリッサンの、パリ時代における批評活動とその時代・思想的文脈を踏まえながら、1965年のグリッサンの評論集『詩的意図』において詩人論を通じて現れる彼の〈世界〉に対する認識を論じました。

2013年4月より、所属を東京大学大学院博士課程に移しまして、新たな環境の中で研究をスタートさせました。今後はグリッサンの初期の詩・評論作品を大きな軸としながら、サン＝ジョン・ペルス、エメ・セゼールといった前世代の詩人たちを展望に入れつつ、より広い視野で、アンティュー諸島の文学的文脈の中にグリッサンを位置づけながら、同諸島の文学的展開を捉え直したいと考えております。またこの2013年はエメ・セゼールの生誕100年の年でもあります。その意味でも本年は、個人的にも長く親しんできたセゼールについて、何か研究成果を出せればよいなと思っております。

博士一年目ということもあり、本研究会では比較的若輩の世代ではありませんが、研究会の活動から大きな刺激を得ながら、私自身も精力的に研究活動を進めて参りたいと思います。



福島 亮 FUKUSHIMA Ryo

所属：早稲田大学文学部フランス語・フランス文学コース

連絡先：fukushima-r.fr@ruri.waseda.jp

フランス語圏アフリカの文学（あるいは、アフリカ出身であるにもかかわらずアフリカ以外の土地で執筆する作家の文学）、ならびに20世紀前半のフランスにおける黒人文学運動に関心があります。現在早稲田大学の3年です。卒業論文では『帰郷ノート』の読解を中心に、雑誌『ヴォロンテ』から『トロピック』にいたるセゼールを扱いたいと考えています。本研究会で勉強をさせていただきたく存じます。まだ、研究とはいかなるものか分かっておりませんが、今、研究会の皆さまとグリッサンのテキストを読むことを嬉しく思っています。よろしくお願ひします。



日本フランス語圏文学研究会

早稲田大学法学学術院立花研究室
 (早稲田キャンパス8号館712号室)
 〒169-8050
 東京都新宿区戸塚町1-104

HP:
<http://litterature-francophone-2012.blogspot.jp/>

Mail:
miyakoo385@hotmail.com

[講演会案内]

2013年11月22日(金) 17:30～20:30 日仏会館1階ホール
 エメ・セゼール生誕100年記念上映会・講演会
 講演者：フランソワーズ・ヴェルジェス
 (ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ)
 (1) 【ドキュメンタリーの上映】 17:30～18:30
 『エメ・セゼールと世界の反抗』(2013)
 監督：ジェローム＝セシル・オウフレ(フランス語、字幕なし)
 (2) 【講演】 18:40～20:30
 『エメ・セゼールと世界の植民地化』(フランス語、同時通訳付き)
 【ディスカッサント】立花英裕(早稲田大学)
 【司会】クリストフ・マルケ(日仏会館フランス事務所)
 【主催】(公財)日仏会館、日仏会館フランス事務所
 【後援】在日フランス大使館、アンスティチュ・フランセ日本

2013年11月23日(土) 17:00 日仏会館6階601号室
 人文社会科学系若手研究セミナー
 講師：フランソワーズ・ヴェルジェス

『植民地から「海外県」へー政治、思想、ネグリチュード』
 (フランス語、通訳なし) 参加費無料

日仏会館

◎ Tel : 03-5421-7641 ◎ Fax : 03-5421-7651 ◎ E-mail : contact@mfj.gr.jp

◎ 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿3-9-25

◎ アクセス：JR恵比寿駅東口・東京メトロ日比谷線恵比寿駅1番出口より徒歩10分

[編集後記]

2013年、長すぎた夏の終わりに、日本フランス語圏文学研究会機関誌「Archipels Francophones」創刊号をお届けすることができました。

当研究会の前身である「グリッサン輪読会」の活動開始は10年前に遡ります。早稲田大学立花研究室を拠点に、カリブ海の作家・詩人エドゥアール・グリッサンのテキストを精読する集まりで、現在なお継続していますが、その間、エメ・セゼール戯曲『クリストフ王の悲劇』上演台本翻訳(2004)、国際シンポジウム「21世紀の知識人——フランス、東アジア、そして世界」での翻訳ならびに出版(2007～2009)、『現代詩手帖』でのグリッサン追悼特集企画(2011)をはじめ、メンバー有志による対外的な活動もおこなってきました。

この秋には、フランスの政治学者、フランソワーズ・ヴェルジェスの来日にともなうコロックにも参加する予定です。

もともと数人でスタートした会ですが、この10年、多くの方が関わってくださるようになりました。メンバーの何人かは、活動期間中に修士論文、博士論文を完成させています。2013年8月には、中村隆之による『カリブー世界論——植民地主義に抗う複数の場所と歴史』が人文書院から刊行され、好評を博していることにお気づきの方もいるかもしれません。また2013年12月には大辻都著『渡りの文学——フランス語作家マリーズ・コンデを読む』も刊行予定です。今後も多くの若手研究者が参加し、多方面から会を盛り立ててくださることを願っています。文学を通し、生産的な活動を広げてゆく日本フランス語圏文学研究会。どうぞ応援してください。

(大辻都)

